

俳人成田千空研究会

# 千空研究

第16号

恋をせよ旅をせよとや実むらさき

—千空句版画—

藤田 健次



この句は、千空さんからの、青春まっただ中を生きる若者たちへのメッセージと受け止めた。私は、23歳の時に3泊4日の津軽半島の旅を、24歳の時に8泊9日の下北半島の旅をした。どちらも、リュックを背負い、ただひたすら歩く一人旅だった。その下北を回った1カ月後、私は妻と知り合い間もなく結婚した。今は、もうすぐ79歳になる老体だが、私にもまた、「恋と旅」の若いころがあったのである。第2句集『人日』より。

(版画家・会員／八戸市)

## 目次

|                             |       |    |
|-----------------------------|-------|----|
| 恋をせよ旅をせよとや実むらさき<br>—千空句版画—  | 藤田 健次 | 1  |
| 千空先生に俳句を習う③<br>季語と時事        | 世良 啓  | 2  |
| 大幸治に魅せられて                   | 西谷ともえ | 3  |
| 〈千空点描〉盃かたむけ文学談義             |       | 4  |
| 千空の受賞歴をめぐって(1)<br>俳人協会賞     | 齋藤 美穂 | 5  |
| 〈作品鑑賞を読む〉⑭<br>土偶みな寝に帰りたき秋の山 | 有馬 朗人 | 6  |
| 〈成田千空資料再録〉⑮<br>現代俳句と風土      |       | 7  |
| 初学の志向                       |       | 9  |
| 私の代表句「大粒の雨」                 |       | 10 |
| わたしの作句三か条「好句の条件」            |       | 10 |
| エッセイ「百歳の俳人 いつか見たい」          |       | 11 |
| 寄贈感謝・会員名簿・北極星               |       | 12 |

## 千空研究会の事業

- ① 詳細な年譜の作成
- ② 千空俳句データベースの作成
- ③ 関係資料の収集
- ④ 関係者からの聞き取り
- ⑤ 会報『千空研究』の発行
- ⑥ 『評伝 成田千空』の刊行
- ⑦ 『合本 成田千空句集』の刊行

季語と時事

世良 啓

人生2回目の句会で、私の雑詠二句は撃沈だった。でもかろうじて宿題の「秋桜」の句だけは選んでもらえた。

秋桜や家出ごっこの日も暮れて

千空さんは「これはどういう情景なのかなあ、家出ごっこっておもしろいね。小さい旅のことなのかなあ。なんとなく家出というのは、寺山修司的だねえ」と早口でつぶやいた。

その頃の私は寺山修司には無関心・ほとんど無知識だったので、寺山的と言われても意味がつかめなかった。ただ自分の中の思い出——小学3年生の頃、さいいなことで母とけんかして本気で家出するつもりで遠くの児童公園まで行ったのに、日が暮れてきて、その夕暮れが恐ろしいほど美しく、急に心細くなって結局は何事もなかったように薄暮の中を家に帰った……という思い出を句にただけだった。意外だったが、でもうれしかった。

他にこの句を選んでくださった方は二人いたが、どちらの感想も、浮かんた情景も連想も全く違うので驚いた。自分でつくったものなのに全く違う受け取られ方をしていた。作品が勝手に歩き出すとはこういうことなのか……と、その時初めてわかった気がした。

寺山修司は「私たちはどんな場合でも、劇を半

分か作ることができない。あとの半分は観客が作るのだ」という発言を繰り返している。後にそれを知った時、それは彼の高校時代の俳句体験から身についた発想ではないか、と思った（もちろんそれは創作したものですべてに当てはまることなのだ）。さて、この日の千空さんの俳句は

よく晴れて川も海いろ鮭帰る  
藁を焼く煙執念く津軽なり  
母郷かな陰も日向も秋ざくら

「鮭」の句は人気があって8点入り、天に選んだ人も2名。千空さんは「これは明るい自然体の句だ」と、「藁焼き」は「ややあたりまえだ」と、「母郷」の句は「やや甘いかなあ」と、それぞれ厳しく自己評価されていた。

この日千空さんがしてくださった俳句のお話のメモを次に挙げる。

〈点取り俳句〉

点取り俳句は芭蕉の時代からの警告である。

手練、<sup>てね</sup>といつて、少し慣れてくると「点の入りそうな句」というのを作りたくなり、作れるようにもなる。つい色気が出る。それがいけない。

点が入る、入らないとは関係なしに、自分の感じたままを句にすることが大切である。手練にならないように、うまくなることが大事だ。

ではうまいとはどういうことか。言葉に弾力があること。のっぺりしてはいけない。

言葉が俳句の中で生きているのか、死んでいるのか。

俳句とは、感動をいかに五七五におさめるかだ。リベラルな発想で、表現はリゴリズム（厳格主義）

であれ。つまり、自由に発想し、厳格に表現することだ。

〈季語なし俳句〉

季語のない俳句、雑の句ともいう。「雑の句あって然るべし」と芭蕉も言っている。つまり、良い句であればよい。季語のあるなしを、現代は超越してしまった時代。季語はなくとも、季節があればよい。歳時記は、本の中にあるばかりではなく、生きているものだ。

俳句は自由に発想し、厳格に表現するものではないが、しかし時には季語を忘れるくらいの覚悟がないといけない句はできない。季語、きまりにとらわれすぎではない。季語を持たず、対象に手ぶらで向かう。感動、印象をはっきり歌いきることだ。

石田波郷は「俳句は私小説である」と言った水原秋桜子の弟子なのに、甘美ではなく、葛西善蔵の影響を受け、一人称文学としての俳句の世界をひらいた。一方で「俳句は文学に非ず」などとも言っている。また「俳句はもう終わりでその晩鐘（弔鐘）をつくのは自分だ」というようなことを言って、中村草田男と対立をした。

ひとりひとりが自分の弔鐘を撞いてゆくのだ  
千空

〈時事の句〉

時事の句は必ずつくっておくことだ。時事をよむことは俳句は短歌に比べて失敗しやすいんだが、それでもうたっておくことだ、時代の証言者となるのだ。

いま当時のメモを読み返してみると、やはり千空さんはどこまでも土の俳句の人だったのだ、と思う。確かに歳時記に載っている季節は、青森の季節感とずれていたり、離れていたりする。ねぶたなど、青森独自の風物もある。それまでは中央で作られた本の歳時記に地方の人間が無理に合わせて俳句をつくるようなところもあったが、そうではなく、実際に自分たちの暮らしの実感、皮膚感覚としての「季節」を一番大切にし、それを句にしっかり据えたのだ。

人間は社会や時代と切り離して生きていけない。点を取る取らないに関わらず、迎合せず時事の句をつくれというのは、戦争を直接経験した世代だからこそ言える重みだろう。

成田千空は風土俳句というジャンルの開拓者だった。机上の観念的な句ではなく、時代と津軽の暮らしに根ざし、そこから生まれるものこそ千空俳句の本領なのである。

(文筆家・高校教師／藤崎町)

## 太宰治に魅せられて

西谷 ともえ

千空さんが太宰作品を愛読していたことはエッセイや取材記録などでよく知られている。エッセイ集『俳句は歓びの文学』から太宰の記述を拾う(以下特に註のないものは『俳句は歓びの文学』からの引用である)。「太宰治と私」には「二十代の頃、

太宰治に魅せられてよく読んだ。大戦争中に病気で臥て、鬱々と暮らしていた若い身には読んで心が癒される小説が多かった。」とある。特に短篇や中篇が印象に残っているとし、たくさんの作品をあげている。千空さんが太宰文学を読みはじめたのは、俳句をはじめた頃で、「私の俳句にも太宰文学の影響があると思われる。」とも書いている。千空さんが俳句をはじめたのは昭和16年である。太宰に長女園子さんが誕生し、十年ぶりに生母たねに会いに金木に戻ってきた年である。このころの太宰は公私ともに充実しており、明るく、ほのぼのとした作品が多いとされる時期にあたる。千空さんは「パロディのおもしろさやユーモアの源泉」を太宰作品に見出した。療養中は「鬱々としたのしまない」生活であったが、「自己救済」のために文芸に関心を持つようになった(私空間 太宰治)という千空さん。太宰の文学は「不思議に心が明るくな」り、太宰の「暗い小説」はあまりいただけなかったが、「暗い小説にもユーモアを忘れない生得的な人間のよろしさがあった」という。また同じく「私空間 太宰治」の中で「反骨と道化と神の作家である。風にも傷つく感性からユニークな文章が生まれた。一度読むと忘れがたい文章が多く、知らないうちにファンになってしまいう人が多いいのではないかと思う。」と書いている。

特に気に入った作品は「津軽」であった。「私はやはり祖先のかなし血に、出来るだけ見事な花を咲かせるやうに努力するより他には仕方がないやうだ。」という言葉に共感したという。「これが彼の文学の理由であり、ならば私の俳句の理由でもありました。」(「炎天焦土」と書いている。また、

### パソコンで「千空研究」が読める

「千空研究会」または「株式会社文芸印刷」で検索すると、会報のバックナンバーが読めます。

疎開中の太宰に会いたいと金木の津島邸を訪れた。太宰は昭和20年3月、三鷹の自宅で空襲にあい、その後疎開先の甲府の妻の実家でも爆撃にあって青森空襲の直後、金木に疎開してきた。そこで終戦を迎え、翌年11月まで金木に滞在した。千空さんは、この頃に津島邸を訪ね、「余りに豪壮な彼の生家に圧倒されて、門をくぐる事ができ」ず、「『このブルジョアめ』とばかり、厚い煉瓦塀をたいて戻」った(「炎天焦土」)。飯詰での帰農生活のスタートを太宰との面会で始めようと思ったのか、単に飯詰と金木の距離的な短さ―「二里ほどの距離であった。」(「太宰治」)―によって訪ねたのか定かではないが厚い煉瓦塀は千空さんの前に立ちはだかった。

その後昭和21年10月に成立した農地改革法により、津島家は所有する田畑の多くを失い、豪邸も昭和23年には人手に渡り、時を同じくして太宰もこの世を去る。千空さんはこの戦後の津島家の急速な衰えと太宰の作品の変化をタイムリーに見ている。太宰の「如是我聞」を読んで「どうか死なないで、よい小説を書いて下さい」と手紙を送ったのが太宰が死ぬ一週間ほど前。「太宰治と中村草田男を、私の志向の目標として自覚したのは戦後である。」という。太宰が死ぬまでを見届けた結果、太宰は「魂の告白を文学の究極としていた作家」であり、「文学に生命をかけていた人だから注目せざるを得ない」(「太宰治と私」と感じた

ようだ。太宰の作品に魅力を感じた千空さんは、戦後まもなく、生家を見てそれが「ブルジョワ」の生み出した文学であることを残念に思うが、戦後、自死するまでの作品を生み出そうとする姿勢とその作品にやはり惹かれて、太宰の文学の理由に千空さんの俳句の理由となるに至ったのである。太宰の没後、太宰が訪ねた「津軽」を千空さんも歩く。



宿泊人名簿に残る署名

外ヶ浜町提供

太宰が自殺した翌年、竜飛岬への単独吟行を私は試みました。(中略)

太宰が泊った小さな宿の、同じ部屋に泊めてもらいました。当時の宿のおばあさんがまだ達者でした。N君が酒に酔って牧水の旅の歌を朗詠すると、太宰がほろりとする、親友交歓の場面がほうふつと感じられ、私もまたひとり酒を飲んで、太宰を偲んだのでした。(中略)

この単独吟行が私の俳句の一つの転機となりました。手ぶらで対象へ向かい、感受したものを俳句にするという、あたりまえのようですが、予知できない俳句を生み出す昂奮をおぼえました。私としてははじめての群作で、「暖鳥」に「玫瑰紀行」と題して四十句発表しました。(後略) (戦後の情景)

竜飛の宿とは奥谷旅館のことで、宿のおばあさんと記述されている初代女将の奥谷たんと二代目女将のツカが旅館を切り盛りしていた。ツカが記入したと思われる当時の宿泊人名簿が残っている。住所に「鳴海文庫」とあるのは、千空さんが「成田書店」と言ったか、「暖鳥文庫」と言ったかしたもの、聞き違えたものだと思う。エッセイには「太宰が自殺した翌年」(つまり昭和24年)とあるが、昭和25年6月7日から8日にかけて泊まったようだ。前夜宿泊地は三厩となっている。

この時作った俳句を「はまなす紀行」と題し、同年7月発行の日発行の「暖鳥」第5巻第41号に掲載された。四十句とあるが、そこには三十九句が掲載されている。上磯街道や曇月の句があり、また、外ヶ浜南下と題した句もある。川口爽郎の『はまなす紀行』を読む―成田千空論の一節―

#### 【千空点描】

#### 盃かたむけ文学談義

千空さんは酒好きで、仲間と語らい飲むことを楽しんだ。突然、「みんなと一杯やりたいな」という電話がくる。選が終わってぽっかり空いた時間のようだ。画家のSさん、川柳のNさんなどを呼び集める。

昔は居酒屋を好んだが、晩年には腰が痛いのか、「ホテルがいい」と言うので、ホテルのレストランに席をとった。

俳句と異なるジャンルの人との会話を楽しんでいた。「川柳はいま、どんな状況?」「画壇は?」などと聞く。自分で語るより人の話に耳を傾けた。終始にこにこして楽しそうだった。

晩年はめっきり酒に弱くなって、足元がふらついた。それでも「楽しいな、楽しいな」が口ぐせだった。

〈佐〉

(「萬緑」昭和28年3月)に千空さんの言葉として、『先日は意を決してひとりで龍飛岬へ俳句をつくりに行つて参りました。十里ばかり歩きましたので、未だ疲れが癒えてゐない感じ。甲羅を背負った亀がやをら首をもたげている。また川口は『はまなす紀行』これは鋭い先天的な感性に貫かれた千空の第一期作品に對

して、この感覚を維持しつつ、真摯な人間的苦悶から詩心の潔さに立至った千空の第二期作品の始まりとして、注目されなければならない。」と結んでいる。千空さんは太宰の跡を訪ねて新しい方向に向かった。その方向はまだ亀のように「のろろ歩き始めたふう」ではあるが、確実に進み始めた。思えば、終戦直後に太宰を訪ねて帰農生活をスタートさせ、太宰の死後には太宰の跡を訪ね「はまなす紀行」を産み出した。蛇笏賞受賞後にも太宰生家跡を訪ねている（『俳句写真館 太宰治と成田千空』「俳句」第47巻7号）。千空さんは転機の時にはいつも太宰を訪ね、自分の文学の原点であり、自らの俳句の理由を確認しているように思えてならない。

（県立青森高校教諭・元県近代文学館副室長／青森市）

## 千空の受賞歴をめぐって(1)

### 俳人協会賞

齋藤 美穂

#### 千空にとつて受賞とは

成田千空の賞歴は、「俳人に授与される主要な賞を総なめにした」といわれるほど輝かしいものです。しかし千空自身は、「賞や名誉が欲しくて作った俳句は一句もない」と述べて、受賞をひけらかすことはなかったといえます。市子夫人は「自宅にも書店にも賞状一枚掲げませんでした」と語っています。一句の成就を求めつづけた千空

は、受賞のたびに「青森の俳人たちの成果」に触れ、また「これまで以上の作品を目指さなくてはならない」と自戒することも忘れませんでした。

多くの俳人や作品のなかで千空がどのような評価を得てきたのか、千空の受賞が県内外にどのような影響を及ぼしたのかという点に注目し、これまであえて取り上げなかった賞歴の周辺について記しておきたいと思えます。

#### 平成元年、満67歳での快挙

俳人協会賞の選考対象は、過去一年間に刊行された「協会会員の句集」となっています。昭和三十六年に中村草田男を中心として設立されたこの協会に千空は入会せず、現代俳句協会にとどまりながら自身の俳句を模索していました。昭和五十九年に師・草田男が逝去し、第二代選者・香西照雄からの推薦もあり、千空は六十一年になって協会会員となりました。香西に続き、第三代選者・北野民夫も逝去するという不幸に見舞われ、『萬緑』存亡に賭ける周囲の強い要望に抗えず、千空は六十三年一月から『萬緑』選者に就任することを決めました。

第二十八回俳人協会賞を受賞した句集『人日』（青森県文芸協会 昭和63年7月1日）は、第一句集『地霊』から十一年目にしてようやく出版された第二句集です。選考委員の千代田葛彦は「青森という遠隔の地にあつて師に体当りしつつ、しかも所謂万緑調になじまず真摯におのが句風を求めつづけていることに、大方の賞賛が集った」（『俳句文学館』第215号）と感想を述べています。

この受賞は東北・北海道では初めてで、また中央の大手出版社から出された上製の句集ではなく、

地方の一書肆が企画した並製の句集であったことも異例のことと話題になりました。（『人日』出版の経緯と影響については、本誌第六号「青森県文芸協会と成田千空（続）」で詳述）。当時八千人を超える会員を擁した全国組織において、地方の風土をとらえて「重厚で普遍的な作品」にまで昇華させた千空に注目が集まったことには大きな意義があります。東京での授賞式では「地方だけでなく、すべてに通じる普遍性がある。十一年間の成果は重く、受賞は地方の力になるのではないか」と講評されました。

千空は授賞式で、「今回の受賞は全国的な評価を受けたことで、うれしく、ありがたい。地方の文化の活性化につながったのではないかと思う」（『陸奥新報』平成元年2月28日）と述べています。その後、青森で催された受賞祝賀会（青森市県教育会館4月16日）で桜庭梵子県俳人協会会長は、「津軽という土地に根を張って句作を続けてきた成田氏の受賞は、地方文化の確かな息遣いを感じさせ意義深いものがあり、われわれの大きな励みとな

### 野坂十二楼句集稿

館田勝弘編

最新刊

青森文芸ブックレット

A5判、82ページ

定価一〇〇〇円

十税

青森文芸出版



野辺地町の俳人野坂十二楼の自筆句集原稿を影印版と活字で表す。明治期作品を纏めた県内最初の自選句集を、百年以上経ってここに公開。

る」(『東奥日報』平成元年4月17日)と祝意を表しました。

### 俳人協会賞から東奥賞へ

結社『萬緑』の選者就任と俳人協会賞受賞という全国的な活躍に対し、千空は第四十二回東奥賞を受賞しました。東奥賞は、東奥日報社が昭和二十三年に創刊六十周年と紙齢二万号記念事業の一つとして制定され、県内各界の功労者に贈られる栄えある業績賞です。当時の俳人協会会長・沢木欣一は『東奥日報』に次のような祝辞を寄せています。

#### 重厚誠実な作風に称賛

成田千空氏が「東奥賞」を受けられることになり、はるかにお祝いの言葉を贈る。千空さんは今年二月、「俳人協会賞」を受賞、今度の賞と重ね重ねの受賞でまことにめでたい。俳人協会賞は石川桂郎に始まり、西東三鬼、相馬遷子、岸田稚魚、古館曹人ほか錚々たる人たちが受賞、文字通り俳壇中枢の賞である。千空氏の句集「人日」は審査員全員の一致で推されたが、東北の風土に根ざした重厚で誠実にあふれる作風が親しみと敬意をもって称賛されたわけである。

千空氏が中村草田男の高弟であるのは周知のところ、志の高い文字精神を最も純粹に継承しているのが氏であり、その成果が認められたのが何よりもうれしい。私は千空氏とは同世代の者で、草田男さんにも昵懇にしてもらったが、草田男亡き後、「萬緑」の雑誌選者を友人の香西照雄が継ぎ、同君が故人と

なった後を千空氏が継いで立派に実を挙げられているのは頼もしく心強い思いである。

前回の受賞は地方、中央の区別を取り払って見事であったが、今度の受賞はさらに俳句が鄙(び)の文芸であるという真価を示したものとしてみたい。意義が深い。  
(平成元年12月4日)

昭和から平成に移ろうとする時代、千空の仕事は「中央と地方の壁を取り払った」として高く評価されました。平成という時代も幕を閉じようとしています。俳人・成田千空は俳句文学史に大きな足跡を遺した俳人であることを、あらためて思わずにはいられません。

(千空研究会調査研究員／五所川原市)

#### 【作品鑑賞を読む】⑭

### 土偶みな寝に帰りたき秋の山

成田千空さんは青森の人、当然『白光』にはみちのくの句が多い。その中に三内丸山二句として、

天高く発掘土偶みな出臍

の次にこの秋の山の句がある。  
縄文の大集落三内山の発掘は、最近の考古学上の大事件であった。千空さんは早速そこを訪ねこの句を得たのである。永い年月安眠していた土偶が、掘り出されて展示されている。その顔を見ていると又地下に戻って寝たいと訴えているように感じたのである。

#### 【俳句文学館】

俳人協会が運営する俳句文芸専門の資料センターで東京都新宿区にある。上京した際は、会報『俳句文学館』など過去の資料や俳誌の閲覧・複写サービスを利用している。  
(齋藤)



青森の秋は短くすぐに冬にいる。秋の山という季語から虫や獣が、冬眠に入る準備をしている様子が見えて来る。土偶も冬眠に入りたいた言っているのである。この句の秋の山は動かない。

ところで三内丸山に丸木小屋が建てられた。考古学者たちの研究に基づいたものである。しかし少々観光目的のようにも感じられる。一考を必要とするところであろう。

『白光』が奥付で赤く印刷されていて面白かった。もう一句引く。

うしみつの闇吸ひて吐く墓のこゑ

有馬 朗人

(『俳句』平成9年6月号)

風土に生きる

現代俳句と風土

成田千空

一 昨年、京都での会合で島津亮と話し合ったとき、島津亮から季題の問題が問いかげられた。私としては季題と風土は分ちがたいという自覚がある。季題という言葉から直ちに歳時記を思いうかべるより、風土そのものが聯想され、風土にかかわる様々な事柄が頭の中で廻転をはじめぬならわしになっている。こうした実体感と精神状況が謂わば氷山の沈潜部として自覚されるかたちで、ざつと、こんな話のやりとりをした。

亮「あなたは季題をどう考えるか」

私「季題は私にとって生きた存在だ。従って関わりがあり、とても、無視は出来ない」

亮「それなら、俳句をつくるとき、殊更、季題に依存するのにか」

私「殊更、季題を手かりにして俳句をつくるという習慣はない。むしろ発想の契機は季題と関係ない場合が少なくない。しかし、モチーフが俳句表現のかたちをとろうとする過程で、生きた存在としての季題がモチーフなり主題に反応する様相で入ってくる。むしろ生きた季題そのものが発想の契機となることもある」

亮「いつでも絶体に季題が入ってくるか」

私「入らない場合だつてある。しかし表現がどうしても薄手な感じがする」

亮「ぼくは季というものを一切無視する。だいいち、ぼくが生きていると自覚する状況は季と何の関係もない」

私「私も発想の純粹を保つ意味では、手ぶらでゆきたい。しかし表現の課程では私が生きている場を無視出来ないと同様に季題を無視出来ない」

私には、この平行線がちよつとやりきれない思いであつたが、お互いの生きている場、というとき、関西の大都会と東北の農業都市ではそんなにちがいがあのかと何かいぶかしかった。で、結局「あなたは拒絶の精神で生きているわけだろう」という私の断定に対して、はじめて彼は「然り」と答えた。しかし彼は又こうも言う。

「農村の俳人で都会風な俳句をつくる奴の気がしれない」。これは一見拒絶的な言葉のようだが、実は、ごく自然な常識なのであつて、彼の筋みちに従えば農村の俳人も農村を拒絶して一向さしつかえないわけだ。しかしこの時、私は島津亮の内部に潜んでいるカオスを感じた。即ち、契機——主題——表現を一貫して季を無視するという彼の意識の奥に不透明な部分があり、季は拒絶出来ても風土は拒絶しきれない生々しい部分が感知された。この矛盾は当然と思える。このことは金子兜太からも感ぜられ、むしろこのカオスがあるゆえに彼等を信じたいくらいである。

二

ここで考えて置きたいことは、「風土」と「自然」は必ずしも同義ではないということだ。自然は人為以前に存在する天然一切の現象ないし物象であるが、風土は自然現象がその土地を固有のかたちに造りあげた存在であ

るのみならず、人為が更に加えられ、固有の地味と成るに到つた存在、従つてその土地固有の人間のいとなみに直接関係する。「畿内七道議(諸)国郡所(郷)名著好字、其郡内所生、銀銅彩色草木禽獣魚虫等物、具録色目及土地沃瘠(壅)、山川原野名号所由、又古老相伝旧聞異事、戴干(子)史籍言上」(傍点は誤植、括弧は正字||编者)という「風土記」勘進の詔はじつに欲ばつたものであるが、風土というものの実体がじかに感得されるのである。自然はその広大無辺に於て諸観念を誘発するが、風土はその固有の地味に於て人間の性情や体質に直接影響を及ぼし、その生活に深いかかわりを持つ。

朝日煙る手中の蚕妻に示す

兜太

冬山が抱く没日よ魚売る母

鬼房

位牌の祖母よ草枯土橋揺れますよ

照雄

秋耕音なした汗の背の鴉の黒

竜太

これらの作者個々の自然に対する姿勢を見ることも出来るが、それより、それぞれの風土につちかわれた氣質というものが、作品そのものの地味となつている点に注意したいのである。人為の外に存在する自然を対象としているのではなく、自然が人間のいとなみと関わりをもつ風土(環境)として存在し、その中に形成された情意が環境と触発して固有の振幅を生み出している作品と見ることが出来る。素朴と言えば素朴であるが、これを例えれば

駒ヶ岳凍て、巖を落しけり

普羅

秋風やそびえていぶる嶽の尖

蛇笏

穂麦原日は光輪を懸けにけり

亜浪

といった作品にくらべて見ると、情意の質がかなり異なつたものであることがわかる。これらの作品は、念力に於て、観照に於て、気宇に於て、格調に於て上質の作品と言え、環境を超越した情意を通して自然に参入した作品と見られる。風土というより、更に宏遠な自然に

於て共通の空間あり、心理的な、或いは生活的な積末性を寄せつけないところに諷詠の張りを生み出しているわけで、作品が自然と対等の威をそなえることを至上としている。

現代俳句に於ける自然は、次第に固有の地味、地勢、生活をふくむ風土として把握されつつある。それは大まかに言つて、人々の関心が、自然——人間——生活、更には社会、という推移に由因すると考えられる。即ち、自然が身近かな生活をふくむ環境として意識される風潮が現われたのである。かつて俳句の広汎な領分を占めていた自然詠に代つて、生活詠を含む風土詠が予想以上に広汎な領分を占めているように思える。

ただ、この場合、風土性を単に郷土色として扱えてもはじまらない。郷土色は生れた土地のなじみ深いムードや風俗の反映にすぎず、風土と主体の関係をあいまいにする。風土を知ることとは自己を知ることでもある。しかし風土は自己を形成する一切ではない。飯田竜太が、「俳句」(三十二年四月号)の座談会で、

「わたしア風土や環境と僕の作品を結びつけられて批判されると一番辛い。参つて、口もきけませんよ。一番参つちやう」

と言つているのも、風土というものを、よく知つていて、土着しきれない要素が自己の内部に在ることを示すもので、むしろこの点に飯田竜太の現代性があると言える。作品に風土の骨格を持つ竜太が、風土に結びつけて作品を云々されることに、恥部を指されたような敏感な参り方をすると、竜太の文学的カオスがある。

日本の近代文学は一口に言つて、風土に土着しきれない人々の精神の記録と言つてさしつかえあるまい。そして精神と資質の矛盾の果に、再び自己の宿命ともいふべき風土を逆に辿らうとする。太宰治の「津軽」の中に、

「汝を愛し、汝を憎む」という言葉があり、「津軽」はその言葉の証(あかし)となつてゐる。

|       |    |        |    |
|-------|----|--------|----|
| 「天保三年 | 凶  | 明治六年   | 凶  |
| 天保四年  | 大凶 | 明治二十一年 | 凶  |
| 天保六年  | 大凶 | 明治二十四年 | 凶  |
| 天保七年  | 大凶 | 明治三十年  | 凶  |
| 天保八年  | 凶  | 明治三十五年 | 大凶 |
| 天保九年  | 大凶 | 明治三十八年 | 大凶 |
| 天保十年  | 凶  | 大正二年   | 凶  |
| 慶応二年  | 凶  | 昭和六年   | 凶  |
| 明治二年  | 凶  | 昭和九年   | 凶  |

——生れ落ちるとすぐ凶作にたたかれ、雨露をすすつて育つた私たちの祖先の血が、いまの私たちに伝はつてゐないわけではない。私はやはり祖先のかなしい血に出来るだけ見事な花を咲かせるやう努力するより他に仕方がないようだ。——三厩飛竜(竜飛)間の荒涼索莫たる各部落でさへ、烈風に抗し、怒濤に屈さず、懸命に一家を支へ、津軽人の健在を可憐に誇示してゐた。ああ、いたづらにケガツの影におびえる事なかれである」

そして、太宰はこの「津軽」風土記を、「私にとつて、なかなか重大な事件であつたと言はざるを得ない」と述懐している。ここでは風土を自己の宿命として感じながら、諦観のめづらしさをとらないで、希求のかたちをとつてゐるわけで、まづとうな風土の扱え方だと言える。

### 三

俳句は自然ないし風土に根ざした日本固有の文芸であることはいふまでもない。しかし、それをつくる人間の意識内容は多様である。風土は人間のいとなみに依つて歴史的事実となり、刻々不断に推移していると考えられる。人間は風土と一元化することも出来るが、対立する

ことも出来る。しかし完全にこれを否定し去ることが出来ると思ふ意識はエゴ以上でも以下でもない。若し、所謂前衛俳句が意識の君臨に依つて風土の実在としての季節を完全に抹殺するならば、それは出来るとしても意識から意識へ綱渡りするに似た芸当が実現するにすぎないことになる。ましてや事は俳句という最短詩型の問題である。現代は人間の危機の時代であつてこの現実をとらえ、思考する以外に現代の表現があり得ないという。それはわかるが、人間に危機をもたらした根元を掴むことなしに、何に對して何を果たそうとするのであろう。なるほど、「ぼくと俳句の関係」。俳句が貴重な薬だつたこともある。薬にすぎり、水のように透明になり、此岸において救われようとしたのであつた。——戦争は、ぼくを、切れ易い糸のように張りつめた、一途で、可憐なりリズムの世界に澄み入ることを可能にした。薬のくせに、糸のくせに、ぼくを隷従せしめていた俳句」(堀野)は、俳句のみならず、戦争に隷従していた無自覚の自己が、戦争を経て、意識が目覚めたときこんどは一切の上に自己の意識を君臨させようとする内部変革が命題となつたと思ふ。即ち、「切れ易い」のは「俳句」のみならず「ぼく」自身であつたという意識の自覚め。しかしそれは「社会的歴史的人間としての自覚」というより、意識を至上とする「エゴの意識」といつた方が適しているように思ふ。彼が訣別した世界は「一途で、可憐なりリズムの世界」としての俳句であり、いわば俳句的ムードにすぎないのである。訣別の対象が、薬のように、糸のように頼りないということから、直ちに否定の対象を可憐なりリズム以外の俳句にまで拡張、ついに古典を含めた前世代の俳句すべてを無縁とすることによつて自己の意識を君臨させていたのである。ここに所謂前衛俳句の特徴が見られる。こうしたエゴの意識は尖鋭になればなるほど、無機質に近くなり、生きも

のとしてヴァイタリティを喪失する。しかし真の前衛なら伝統のすべてを血肉化した上で新しい道を切り拓くであろう。俳句の伝統は日本の風土と切り離して考えることが出来ない。

「伝統を軽べつすることはバカゲているでしょう。しかし、人間的諸関係が常に改善されるべきものであるとすれば、われわれの自意識や知性が成長するにつれて、われわれは伝統をコントロールし、それに対して批判的な態度をとり始めねばなりません。受け入れられている伝統の中で、何がわれわれの運命と尊厳にとつて有益であるかをわれわれは認識しようと努めるべきで、それに従つてお互いの生活を形成してゆかねばなりません」というアインシュタインの言葉はごく常識的で正当な判断とも思える。もともと風土や伝統は人間の基盤の問題であり、常識なのだ。しかしバカゲた問題ではない。

(万緑)

『俳句』平成10年9月号

## 「ついでに学んだ私の投句時代」 初学の志向

成田千空

大正10年生(萬緑)

「萬緑」が創刊されたのは昭和二十一年十月である。当時、私は青森空襲で焼け出され、北津軽の母の故郷に移住して、帰農生活をしてきた。俳句をはじめから五年経っており、青森俳句会に拠っていたが、友人に熱心な「ホトトギス」の投句者もいて、会うたびに中村草田男の俳句が話題になった。改造社から出ていた『俳句研究』でも草田男は注目的であり、大野林火の『現代の秀句』で決定的に草田男を目標とするに至った。感性和

知性において、文学のほかのジャンルの優れた作家に比肩できる俳人は、草田男以外にいないと思われた。ぞっこん惚れ込んだわけである。ほかに好きな俳人がいろいろといたが、師としたい人、ということになれば先ず中村草田男であった。五年ほどの初学時代を経て、すでに自分の目標が見えてきて、生涯の師を選んだことがよかったのではない(か)と思う。

昭和二十一年の秋のある日、朝日新聞の広告欄に、中村草田男主宰の新俳誌「萬緑」が創刊されたことを知って、ところが躍ったことを覚えている。直ちに入会を申し入れたので、たぶんいちばん早い入会者であったかもしれない。創刊号は意外に薄い俳誌であったが、高浜虚子、斎藤茂吉、高村光太郎、室生犀星が寄稿しており、「創刊に際して」という草田男の一文は、敗戦後の日本に生きる生き方と、俳句の在り方を一体として示した、旗幟鮮明な文章であった。「一個の俳句は、飽くまでも〈俳句〉としての要素と〈文学〉としての要素から成立して居る。〈俳句〉とは俳句の特性に関する制約の一切を指し、〈文学〉とは作者の内面界に於ける無制約の豊富な内容を指す」。無制約の内容を制約する芸は実作において鍛えるしかない、果てしない道と思われた。「近來の俳壇は、各結社の上に、一種の綜合化を計ろうとする傾向がある。横への広い連絡と共力。それを出来るだけ実現させてゆきたい。しかし、これにも亦、縦への統一が先行しなければならぬ。〈結社意識〉と〈結社精神〉とは別個の物である。中心の本核をなす〈結社精神〉は、正しく逞しく樹立しなければならぬ」。文学的に格調の高い俳誌として出発したのである。張り切って投句した。会員の雑詠が発表されたのは第三号からであったが、私の句はしばらく載らなかつた。全没かもしれないと思つた。「ホトトギス」では全没が多く、一句でも載ると赤飯を炊くなどという話を聞いていたから、草田男はや

はりホトトギス系の俳人であり、選もきびしいのだと思ひ、一層張り切って投句を続けた。雑誌はふところに入られて、畑仕事の合間にも読んだ。草田男の俳句とエッセイがおもしろく、雑詠の選評が又懇切をきわめて引きこまれた。だが、雑誌は月々スムーズに出なかつた。草田男先生の選が遅れがちだという。雑誌が月々きちんと出るための事務的なサイクルと、俳句作家としての創造のサイクルが噛みあわないのであろうと思ひ、私は雑誌の遅刊はあまり気にとめなかつた。私自身草田男先生と多少似たところがあるのかもしれない。ただ、全国からたくさん集まった会員も、遅刊と共に次第に減っていったのは事実であった。当時の日本の文化状況を反映していたとも見られる。昭和二十二年六月頃、「萬緑」の発行がづいに頓挫したことがあつた。私は草田男先生に励ましの手紙を書いた。出版社の発行から離れて、「萬緑」独自の運営メンバーによる発行に切りかえられ、生れかわつたのであつた。高岡徳太郎の裸婦の表紙にも、あらたな意気込みが感じられた。

私をはじめて草田男選の選評に採りあげられたのは、昭和二十二年の十一月号であつた。

## 大粒の雨降る青田母の故郷

作品の季節と発表された季節が大分ずれているところから見ても、遅刊の察しがつくのである。草田男評は「際涯のない青田は母の乳房ある胸のように、ありのままに生々としていてすべてを享けられる。時に白雨がくれば撥き撥いて其の白玉を躍らす。一応男性的な情景を描いて、逆効果的に、母性につながるもの魅力を表現している」というのであつた。青森空襲の地獄から母郷の青田へ転じた、忘れがたい俳句体験で、多少甘い評とも思われたが、私の俳句の道に一燈が点じられた感銘が

あった。選者にみとめられる決定的な一句が、投句時代の眼目であろう。

昭和二十三年一月号で、はじめて雑詠〈樹頭の花〉の巻頭に選ばれた。

空蟬の脚のつめたきこのさみしさ

炎ゆる砂地掠めしつばめ懐しや

大望に遠く杭ぜに菜屑溜る

父の日の餅あしつよき餅をつく

季語の約束にあまりとらわれない自由な詠み方で我ながら初々しい作品であるが、草田男は三頁にわたって批評され、「作品の表面で悪戦苦闘しているようなアガキがなくて、しかも俳句プロパーに決して墮していない、中心から発力と、一種のうるおいがある」とされた。だが総合俳誌の月評ではけなされた。草田男評にくらべて月評子の読みが浅く思われ、だが、俳句評価のむずかしさが思われた。

『俳句』平成14年2月号

俳人が自解する「私の代表句」

## 大粒の雨

成田千空

大正10年生(萬緑)

代表句とは自分にとって忘れたい俳句であり、人からも評価された俳句である。感動から発して、言葉が確かであれば、自分の俳句となり、人にも伝達されるはずだが、長い歳月の間に、類想の世界に埋没することもある。代表句として残るのは、特色と普遍性が一体化した、恵まれた句といっただけであろう。自分の代表句が俳句集の代表句となり得るかどうかはわからない。

大粒の雨降る青田母の故郷 昭和23「萬緑」

昭和二十年の青森空襲のあと、北津軽の母の故郷に移住して帰農生活に入った。ある日、農作業の帰り道で俄か雨に会った。大粒の雨に青田がいっせいにぎわめいた。空襲で見た地獄とは逆の生気が胸にひろがり、口をついて出た句である。中村草田男の評価を得た最初の句である。

去年今年一と擦りに噴くマッチの火 昭和31「萬緑」

マッチ全盛の時代である。軸木の丸い頭薬と、箱に塗布された側薬をこすって発火させる。新しいマッチは発火力もよく、気持ちが良い。去年今年をつらぬく時間帯に噴いた新しいマッチの火は感動的であった。私は今もマッチを愛用している。

桃馥郁病む辺も風の通りみち 昭和42「萬緑」

前癌症状の疑いで胃を手術した。当時は大手術であった。一か月の入院生活で自然には自然の呼吸があることをさとした。見舞の桃が馥郁として、病床の辺りにも風の通りみちがあることを発見した。

ししうどや金剛不壊の嶺のかず 昭和62「萬緑」

昭和五十八年に中村草田男先生が亡くなったあと、二代選者の香西照雄も亡くなり、北野民夫氏が三代選者となり、その夏、長野で萬緑全国大会が行われ、美ヶ原に吟行した。南アルプスの展望がすばらしかった。

妻老いて母の如しやとろろ汁 平成6「白光」

妻は老いるにしたがって、思いやりが深くなり、同時に小うるさくなる。母のように。おいしかった母のとろろ汁を思いながら、妻のとろろ汁を味わうのである。

『俳句研究』平成10年12月号

中級徹底講座 第十二講 わたしの作句三か条

## 好句の条件

成田千空

一、発想は自由が大事。

私にとって、俳句は十七音と季語を基本形式とする文芸ですが、発想はものに触発したエモーションにあります。エモーションとは動いた感情のことですが、強い動きもあれば微かな動きもあって、さまざまな現われ方をしますが、むしろ無形の微かな動きの方に、これまで経験しなかった感情をおぼえます。それは私にとって新しい俳句のタネなのです。理知だけでも俳句の発想は可能ですが、理知よりも感情を優先するのが、私の信条です。血のかよったことばが生れるようです。俳句の味を、ワビとかサビとかカルミといったイデーで考えないで、私という主体の内がわに発生した無形のエモーションを、ことばとして表現することになります。中村草田男に次のことばがあります。「俳句の味をきまった物差ではかりとるような客観的な差が別にあるわけではない。どこにも真のあるところ、むしろその掴み方、生き生きとした本物の体験的な認識、うねって行く考えそのものにある」。

一、表現はリアリティが大事。

私にとって発想は自由ですから、これまで様々なかたちの俳句を生みだしてきました。師匠の中村草田男ばかりではなく、関心のある俳人の作品をたくさん読み、多様な俳句の世界を内に蔵しているわけですが、けっきょ

くのところが、リアリティのある俳句だけが、確かな存在として残っているのです。多様な俳句といえば、草田男ほど多様性のある俳句を生み出した俳人はいないだろうと思いますが、もし多様の統一ということを考えれば、リアリティのある俳句によって統一されるだろうと思います。例をあげてみます。

曼珠沙華落暉も薬をひろげけり

赤き幹冬の松籟捧げ立つ

蒲公英のかたさや海の日も一輪

空は太初の青さ妻より林檎うく

葡萄食ふ一語一語の如くにて

慕の子や土気すんなりと目大きく

母の日や大きな星がやや下位に

髪の内から奥からの妻の汗

等々、自由に発想しながら、現実性や実在性や本質性が表現されています。ピカソの「ゲルニカ」のリアリティについて、草田男と語ったことがあります。

俳句は写生ばかりではなく、様々な映像が生かされてもよいと思いますが、映像には映像としてのリアリティがあるはずですが、しかも俳句表現としての確かさが必要です。リアリティとは確かさといってもよいでしょう。自由な発想ほど芸の確かさが必要で、その基本として写生を大事にしたいと思います。

一、かたちは自然体が大事。

俳句の世界には数限りない俳句が作られているわけですが、類想の海のような感じさえします。それで試行錯誤もまた俳句特有の現象と感じられます。かく申す自身、試行錯誤をくり返しながら、わが道を探し求めてきた長い時期がありました。初期の頃からいわゆる人間探求派の影響をうけてきたこともあって、受動的な客観写生よりも能動的な主観表現に惹かれていました。虚子の

『進むべき俳句の道』もまた主観を生かした写生と理解して、共鳴しました。草田男の「芸と文学」、林火の「芸と芸以上」など、新しい俳句の世界が予感された説でした。それでずっとやってきたともいえるわけですが、作った痕跡が残る俳句ではないかと思いはじめました。一句が成ったときに、一句の世界が生れ、言語空間が生れている俳句をよしとするようになったのは、年齢のせいかもしれませんが、実は心に残っている俳句は初めから自然体において成立した俳句、と思いいちりました。

種蒔ける者の足あとと治しや 草田男

『読売新聞』平成14年12月11日

〈しおり〉

## 百歳の俳人 いつか見たい

成田 千空

私が俳句をはじめたのは、昭和十六年太平洋戦争がはじまった年である。東京の軍需会社に勤めていて、肺をわずらい、津軽に帰郷して間もなく、俳句に手を染めたのであった。二十歳だった。

あとで知ったことだが、正岡子規をはじめ、肺病の俳人が実に多い。十代か二十代で肺病という死病にとりつかれて、どう生きればよいのか、考えて分別くさい青年となり、俳句を始めるらしいのである。俳句を文学として志向する、現代俳句の思潮も生まれたと考えられる。だが、同じ文学の道でも、俳句のために自殺する人などめったにいない。それは五七五の定型で鍛えられているからだと思う。もう一人人間の生活ばかりではなく、

初蝶や吾三十の袖袂 波郷  
驚けば秋の鳥なる鳥骨鶏 楸邨  
それぞれのエモーションに確かな表現を与え、それぞ  
れの世界が生れています。

芭蕉が「作意の跡をとどむべからず」といったのも、  
作意そのものではなく、作意の跡が残る不自然さを指摘  
したのです。作意は大事ですが、作意の跡を消すことは、  
もっと大事です。

自然という広大な世界になじんでいるからではないかと  
思う。

比較的長命な人が多い。長い年月をかけて熟成する文  
芸なのである。先年、九十歳で亡くなった能村登四郎氏  
などそのひとりである。「行く春を死でしめくくる人ひと  
り」。だが俳句の類想を寄せつけない、中村草田男や金  
子兜太氏等は未完成のエネルギーがあって、熟成しきれ  
ないが、端倪すべからざるものがある。そしてときおり  
キラリと光る。「おおかみに蛭が一つ付いていた 兜太」。  
今年の蛇笏賞は金子兜太氏に決まった。彼は八十三歳で、  
元気のよい俳人だが、「百歳ぐらいまで生きて、探求を続  
ければ、新たな俳句の地平がひらけるように思われる」。  
今年の春さきに、家内の母親が百二歳で亡くなった。  
晩年盲目となって、施設で暮らしたが、身だしなみはい  
つもきちんとしていた。「ありがとうございます」が口  
ぐせであった。兜太氏の母親も百一歳で今も元気とのこ  
と。長命の俳人は多いが、百歳の現役の俳人はまだいな  
いようである。  
(俳人)

寄贈感謝

浅利康衛さん(青森市)『まほろば』9・11月号  
西谷ともえさん(青森市)『青工』第2号 コピー  
上條勝芳さん(八戸市)『村次郎通信』第2号  
『八戸の詩人 村次郎の会10周年記念誌』

原稿を募集しています

会報『千空研究』の原稿を募集しています。  
1. 調査・研究に関するもの(4000字以内)  
2. 回想の成田千空(2000字以内)  
締め切り 第17号は1月末、到着順に掲載します。  
送り先 (下段発行所、青森文芸出版あて)  
\*Eメールで送信くださる場合

sasaki@a-bungei.co.jp

会員を募集しています

会報『千空研究』継続配布をご希望の方は、会員としてご登録ください。会費は年10000円です。  
2018年会費を領収しました(敬称略) No.15以降  
松宮梗子、草野力丸、浅利康衛  
2019年会費を領収しました(敬称略)  
葛西幸子、藤壱まさ志、兼平一子

青森文芸ブックレット

わが心の〈千空〉

俳人 成田千空研究会編  
会報「回想の成田千空」24編 税込9200円

千空句帖

文学で青森を応援する会編  
戦時下の手作り句集を写真版で 税込10800円

中村草田男訪問記

成田千空  
「暖鳥」掲載文と私小説風元原稿 税込5000円

\*お申し込みは青森文芸出版 ☎0173-335-5323

会員名簿(63名)

- 〈青森市〉 浅利康衛、荒谷信子、齋藤光子、佐藤陽子、高森ましら、中嶋義雄、成田市子、西谷ともえ、野沢省悟、野村正彦、浜田しげる、未津きみ、吉田州花
- 〈弘前市〉 阿保子星、石崎志亥、泉 風信子、市田由紀子、鎌田義正、後藤 隆、佐藤 繁、館田勝弘、土田紫翠、成田圭子、三上弘之
- 〈黒石市〉 鳴海顔回
- 〈藤崎町〉 清水雪江、世良 啓
- 〈八戸市〉 上條勝芳、小林凡石、仁科源一、藤田健次
- 〈十和田市〉 米田省三
- 〈五所川原市〉 会津明郎、荒閑映子、一戸 鈴、葛西幸子、木津谷絹子、櫛引麗子、齋藤美穂、櫻庭利弘、佐々木あさ子、佐々木達司、高橋睦子、奈良知治、浜田十三、松宮梗子、山内ひろ子
- 〈板柳町〉 木村玲子
- 〈中泊町〉 外崎文夫
- 〈つがる市〉 兼平一子、工藤清泰、中村雅之
- 〈深浦町〉 草野力丸、山本こう女
- 〈岩手県盛岡市〉 瀬川君雄
- 〈茨城県那珂市〉 永山憲子、寺門資子、矢須恵由
- 〈茨城県水戸市〉 糟谷雅枝、小泉光子
- 〈茨城県日立市〉 高井まさ江
- 〈千葉県流山市〉 藤壱まさ志
- 〈大阪市〉 川東郁代

☆北極星☆

○西谷ともえさん「太宰治に魅せられて」には、千空さんの太宰追っ掛けぶりが紹介されている。太宰が自殺したあと竜飛へ吟行、奥谷旅館の太宰の宿泊した部屋に2泊している。宿泊名簿の写真には前泊地と行先地が三廐と記されている。  
○齋藤美穂さん「千空の受賞歴をめぐって」(1)は、俳人協会賞。受賞歴という視点で千空をたどる試み。  
○世良啓さん「千空先生に俳句を習う」③は、季語と時事。千空の俳句観が垣間見られておもしろい。  
○本会会員でもある八戸の上條勝芳さん・仁科源一さんを中心に、詩人村次郎の会が10周年を迎えた。地道な活動が成果をあげている。千空さんも『文芸おおもり』の中寒二との千空対談で、村次郎について語っている。  
○本会会員であり県郷土作家研究会代表理事の館田勝弘さんが『野坂十二楼句集稿』を翻刻刊行した。十二楼は野辺地の俳人で、俳句研究に一石を投ずる労作。  
○弘前市出身の直木賞作家の長部日出雄さんが10月18日、虚血性心不全のため亡くなられた。84歳。  
○むつ市の川柳作家高田寄生木さんが、肺炎のため3日に亡くなられた。85歳。千空さんのファンだった。

2018年11月20日発行  
会報『千空研究』第16号 非売品(会員配布)

発行 俳人 成田千空研究会

佐々木 達 司

〒037-0004

五所川原市唐笠柳藤巻467

青森文芸出版内

TEL 0173-335-5323

FAX 0173-335-8414